

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Tibetan Color Terminology

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 長野, 泰彦 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004524

チベット語の色彩語彙

長 野 泰 彦*

Tibetan Color Terminology

Yasuhiko NAGANO

This brief paper is designed to analyse the system of Tibetan color terminology. Since such a clarification has not been attempted yet, this paper is rather descriptive than theoretical.

When terminology is analysed, the understanding of the informant and the linguistic investigation (including historical analysis) hold the same level of significance in this paper. In that sense, this argument is fairly different from that of Berlin & Kay.

A speculative hypothesis on the historical change of Proto-Tibeto-Burman system of color terms down to Tibetan, from the point of view of Tibeto-Burman comparative linguistics, is presented.

まえがき

判

I. チベット語色彩語彙の記述とその来源

M. チベット・ビルマ共通祖語における色彩

II. チベット語色彩語彙体系の分析

語彙体系とその変遷

III. 色彩語彙に関する一般理論——紹介と批判

むすび

ま え が き

色彩が言語においてどのように表現されるか、という問題は、言葉とそれをとりまく事象の捉え方——所謂、相対的態度（サピア・ウォーフの仮説）と、それに対する普遍的態度——を絡め、様々な分野で様々な方法により議論されてきた。特に、民族学・文化人類学の方面では1960年代から組織的な研究が進められ、認識の普遍性や基礎的色彩語彙の発展過程などについて、それなりの成果をあげている。言語学におい

* 国立民族学博物館第1研究部

ても、lexical semantics の分析対象として色彩語彙がとり上げられ、見るべき業績も幾つかある。

しかし、それらの研究はその個別言語の持つ色彩語彙体系や語彙の来源^{らいげん}を明らかにしないまま、主として Foci (色見本からインフォーマントにどれが最も基本的な色かを選ばせるフィールドワークの一方法) によってその言語の基礎色彩語彙を決めるものが多く、又、形態論的・統辞論の手順を踏んだ業績は少ない。

小論は、このような研究傾向に対し、チベット語という個別言語における色彩語彙体系を、主として語彙の歴史と語構成の面から明らかにしようとする試みである。インフォーマントとの調査によって得られた結果を尊重することは論を俟たないが、それらに言語学的吟味を加えて、何が帰納され、どこまで演繹し得るかを探ってみたいと思う。

ここに扱うチベット語とは、現代口語中央チベット方言であるが、来源^{らいげん}を調べる際、辞典¹⁾に記載されている古典・文語チベット語も参照した。仏典に規定される色彩語彙を除けば、チベット語のそれがその古典期から現代まではほぼ等質の体系を持っていることは、第 I 章の記述から肯んぜられる処であろう。

インフォーマントは、元東洋文庫研究員 祖南洋氏である。同氏の熱意と広汎な学識がなかったら、このような豊富なデータを集めることすら不可能であったと思われる。記して深甚の謝意を表したい。

色の属性とその記述方法

一般に色とは可視光の内、波長がほぼ 440-660 m μ の範囲にある電磁波であって、その波長の差が色相 (色あい: Hue) の違いとなり、そのスペクトル色光に白色光を加えるにつれてその純度 (Chroma) が減じ、又、放射の強さによって明度 (Brightness) が規定される。色彩はこれら三要素を数値によって記述するのが最も厳密であり、逆に色を再現する時も、それらの要素を光を用いて組み合わせるのが理想的である。しかし実際には、多くの色票を備えて直接の見本とする方が便宜であることも多く、この調査も色票によって行った。色票は、十の色相を更に四つの細い色相に分割し、それぞれに明度・純度が異なる紙片がついており、色相・明度・純度(飽和度)に名と番号とを付して色を区別する。よく整備された色票として、Munsell²⁾、Grum-

1) JÄSCHKE, DAS, 格西曲札, BUCK, DESGODIN, GOLDSTEIN, SEDLÁČEK, 『翻譯名義大集』、『五体清文鑑』を参照したが、以下一々注記しない。

2) 2441 No. Calvert, Baltimore, Maryland, U.S.A. へ直接注文しないと入手できない。

bacher, 新制色名帳 (日本標準色協会), 標準色彩票 (大蔵省印刷局) などがあるが, この調査では Munsell と Grumbacher とを用いた。Munsell 色票は最も完璧と考えられており, 上述の細かい差を極めて厳密に表わし, 一様の感覚差によって排列しているのだが, その色票数が龐大で, インフォーマントが混乱することがしばしばだったため, 先ず Grumbacher の Color Visualizer Chart を用いて色相と明度とを調べ, 後に明度と飽和度を Munsell によって確める方法を採用した。

Grumbacher Chart は108種の色を色相と明度によって排列してあり, 飽和度は, pure color column がその色相における最も高い純度になっている他は, 低く, 且つ, 一定になっている。従って, Munsell 程科学的とは言えないが, 実用上はこれで充分であり, Munsell による再点検によってこの不備を補うことができた。

色相名称は Grumbacher に, 明度・飽和度表示は Munsell に従った。色相名の対照表を次に掲げる。

Munsell	Grumbacher	色相名称
GY	YG	Yellow-Green
BP	BV	Blue-Violet
P	V	Violet
RP	RV	Red-Violet
2.5 YR	YO	Yellow-Orange
5/7.5 YR	O	Orange
10 YR	RO	Red-Orange
B	B	Blue
BG	BG	Blue-Green
G	G	Green
Y	Y	Yellow
R	R	Red

チベット語表記は正書法により, 転写方式は北村甫 [1974 b] に従う。

I. チベット語色彩語彙の記述とその来源

1. 語彙の記述

Grumbacher Chart によって得られた色彩語彙は図1に掲げた通りである。以下, それぞれの語彙項目について検討する。矢印は修飾の方向を表わす。

		← 明 度 →									
		1.5	2	3	4	5	6	7	8	9	
		gzings nag			gzings dmar			gzings skya			V
		du mdog				sngo dmar			sngon po		BV
		sngo nag			sngon po		sngo dkar (sngo skya) (g-yu mdog)				B
		ljang gu			sngo ljang						BG
		ljang nag			ljang gu			ljang ser	ljang dkar		G
		ljang skyang	ljang gu		ljang ser			ljang ser dkar po			YG 色
		smyug se		gser nag	gser po	skyer kha snum pa		skyer kha			Y 相
smyug se nag po	ser nag		ser dmar			ser po snum pa		ser po			YO
rdza mdog nag po		rdza ser		dmar ser			ser po gser mdog			O	
mchin kha		rdza dmar		li dmar (dmar ser tsha po)			li bang			RO	
gzings nag		gzings dmar	gzings nag	dmar po			dmar skya	kham bu mdog		R	
		gzings nag			gzings dmar			gzings dmar dkar po			RV

図 1

V-9 }
V-8 } gzings skya
V-7 } ↑

gzings は「紫色」、skya は「灰色」を表わす。gzings は現代口語では殆んど色相名にしか使われないが、zing, 'dzing とも綴られ、元来「(毛髪や灌木が) もじゃも

じゃした」の意を表わしたものであり、nominalizer としての -pa のみをとることから、動詞から来源した形容詞であると考えられる。

$$\left. \begin{array}{l} \text{V-6, RV-7} \\ \text{V-5, RV-6} \\ \text{V-4, RV-5} \end{array} \right\} \text{gzings dmar}$$

dmar は「赤い」であり、nominalizer として -po のみが接尾され得る。この語源は明らかでないが、文語チベット語（以下 WT）の dkar 「白」と 'khar 「青銅」が、チベット・ビルマ共通祖語（以下 PTB）の *kar から分裂したものと考えれば、WT の「赤」も d-mar と分節することができ、d- を比較的新しい段階で接頭されたものと見做すことが可能だが、Benedict [1972]（以下 STC と略す）は PTB *mar の形を再構していない。

尚、WT mar は「バター」の意である。

西義郎教授の御教示によれば、タマン祖語 *mar は「金」を意味するとのことで、この意味範疇が WT dmar と関係あることは確かであろう [cf. 西 1977]。

$$\left. \begin{array}{l} \text{V-3 RV-4} \\ \text{V-2 RV-3 R-2} \\ \text{V-1.5 RV-2 R-1.5} \\ \text{R-V1.5} \end{array} \right\} \text{gzings nag}$$

nag は nag po の語幹であり、「黒い」の意。

$$\left. \begin{array}{l} \text{BV-9} \\ \text{B -6} \\ \text{B -5} \end{array} \right\} \text{sngon po}$$

sngon の underlying form は sngo で、「青い」を表わす。sngo が物質を指す例として、「草、植物」があるが、この用例はそれ程古くなく、又、sngo tshod 「野菜」、sngo lo 「葉」のように複合語として現れることが多いことから、二次的な意味と考えてよいであろう。

sngo が「緑」の意味領域を含み込むことは、日本語の場合と同様、極めて頻繁に起こる。例えば、交通信号の緑色は必ず sngo であって、ljang 「緑」は用いられない。

チベット・ビルマ諸語の多くがこの形式で「白い」を表わす点には注目すべきであり、STC も「白い」に PTB *spow (STC # 296) を再構成している。仮にこの再構成形式が正しいとすれば、PTB から WT への間の何れかの段階で、「白」→「青」という意味変化を経たことになる。

BV-8 }
 BV-7 } sngo dmar
 BV-6 } ↑ ↓

BV-5 }
 BV-4 } du mdog
 BV-3 } ↑ ↓
 BV-2 }
 BV-1.5 }

du は「煙」、mdog は「色」の意である。WT には「色」を意味する語として、mdog, tshos gshis, kha の三つがある。WT では、mdog は自然色を、tshos gshis (tshos: 染める, gshis: 特性) は染料の色を、又、kha はしっとりした物の表面の色を、それぞれ表わすが、現代口語では tshos gshis が最も広い意味領域を占める。

B-9 }
 B-8 BG-9 } sngo dkar / sngo skya / g-yu mdog
 B-7 BG-8 } ↑ ↑ ↑

インフォーマントはこの三者を区別しないが、辞書の記述によると、B-9 と BG-9 が sngo dkar, B-8, BG-8 及び B-7 が sngo skya ではないかと思われる。g-yu mdog は辞典に記載が無いが、g-yu は「トルコ石」の意である。

dkar は「白い」を表わし、-po のみが接尾し得る。Nagano [1979 a] では、WT dkar が PTB *kar 「青銅」から直接来源しているとしたが、「白い」と「青銅」は、WT で dkar vs. 'khar の様に弁別されている(西田龍雄教授の御指摘に従う)ので、前の仮説は撤回する。ただ、WT dkar が「白い」と「錫」の双方を意味することは確かであり、又、STC が *gar 又は *d-gar の形を金属名として再構成しておらず、「錫」に対する再構成形式もないことから、PTB *kar が WT で dkar と 'khar に分裂し、それぞれ「錫」と「青銅」を意味するようになったと想定しておきたい。これはあくまでも想定であって、今後チベット・ビルマ (T-B) 諸言語の比較研究によって修正されることになろう。

B-4 }
 B-3 } sngo nag
 B-2 } ↑ ↓
 B-1.5 }

BG-4 }
 BG-3 G-7 } ljang gu
 BG-2 G-6 YG-4 }
 BG-1.5 G-5 YG-3 }

「緑」の意であるが、この語は WT ljang ba 「芽」、及び、lcang 「柳」と同源であ

と思われる。単独で用いられるときは常に縮小辞 *-gu* を伴う。*Mahāvvyūṭpatti* に梵語 *harita* の訳語として現れるのを初出とし、早い時期から色名として使われたことが分かるが、これだけでは色名が先か、物質名（「芽」又は「柳」）が先かは俄かに定め難い。

ljang の持つ重要な意味領域として、「未熟な、手を加えていない」を挙げておかなければならない。例えば、*ljang phrug*（緑・子供）は「新生児」の意であり、日本語の「緑児」と平行する感覚であろう。

BG-7 }
BG-6 } sngo ljang
BG-5 } ↑ |

G-9 } ljang dkar
 ↑ |

G-8 }
YG-7 } ljang ser
YG-6 } ↑ |
YG-5 }

ser は「黄」の意であるが、WT *gser*「金」と同源である。*gser* も亦色名として存在し (cf. O-9・8), 知識階級はこの二者を区別するが、全く同音であり、元来この区別は無かったのではないと思われる。ラフ語にも同様の現象が見られ、*śi* は *yellow* と *golden* の両方を意味する [MATISOFF 1973: 661]。又、西田教授も、「銀」と「白」、「金」と「黄」がそれぞれ、リス語、ラフ語、ビス語、アカ語において共通形式を保存している点を指摘され、更にトス語における事例にも言及しておられる [西田 1968 a: 5, 1973: 235-236]。

ser に接尾する小辞は *-po* である。

G-4 }
G-3 } ljang nag
G-2 } ↑ |
G-1.5 }

YG-8・9 } ljang ser dkar po
 ↑ | |

YG-2 }
YG-1.5 } ljang skyang
 | ↑

skyang は「高陵土」の意で、*skyang* の後に *mdog*「色」が接続することもある。

Y-9 }
Y-8 } skyer kha

skyer は「うこん草 *Curcuma longa*」で、チベットでは代表的な染料の一つである。
kha については、BV-5 の項を参照されたい。

Y-7 }
Y-6 } skyer kha snum pa

snum は「油」、snum pa は「油っばい」の意である。

Y-5 } gser po

G-8 の項に述べた通り、gser po は「金色」を表わす。nominalizer は -po のみである。

Y-3 }
Y-2 }
Y-1.5 } smyug se

smyug は「竹」、se は ser 「黄」の異形態。

YO-9 }
YO-8 } ser po

YO-7 }
YO-6 } ser po snum pa

YO-5 }
YO-4 } ser dmar

YO-3 }
YO-2 } ser nag

YO-1.5 } smyug se nag po

O-9 }
O-8 } ser po gser mdog

O-7 }
O-6 } dmar ser
O-5 }

O-4 }
O-3 } rdza ser

rdza は「壤土」を表わす。

O-2 }
O-1.5 } rdza mdog nag po

RO-9 } li bang

li は WT li khri 「光明丹」から来源していると考えられ、li bang 全体で「オレンジ色」を表わす。bang が何を意味するかは分からないが、漢語からの借用の可能性もある。又、li も漢語「梨」からの借用ではないかと思われる。西田教授の御教示によれば、li bang は WT li-wang 「硫黄」にあたり、li は漢語「梨」からの借用、wang は「黄」からの借用と思われ、又、この語の形式全体が「硫黄」の借用である可能性もある、とのことである。又、張琨教授の御意見では、『説文』に「留黄」を説明して、「葇草名可以染」とあり、『段注説文』では同語を注して「又作流黄駮黄」「其色黄而近緑」と出ているので、おそらく「留／流／駮黄」の借用であろう、とのことであった。

RO-7 }
RO-6 } li dmar / dmar ser tsha po
RO-5 }

tsha po は元来「暑い」の意であるが、「きつい、強い」をも意味し、色彩語への modifier としては後者が適用される。

RO-4 }
RO-3 } rdza dmar

RO-2 }
RO-1.5 } mchin kha

mchin は「肝臓」の意。

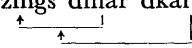
R-9 } kham bu mdog

kham bu は「杏子」、-bu は小辞である。

R-8 } dmar skya

R-7 }
R-6 } dmar po
R-5 }

R-4 } dmar nag

RV-9 } gzings dmar dkar po


2. 明 度 指 標

前節の記述から、明度の高い（明るい）色には modifier の位置に dkar が現れ、明度の低い色には nag が現れることが分かる。この点を Munsell 色票によって再確認しておこう。

先ず中立色（色相を持たないもの）についてであるが、明度9の中立色が dkar、明度8～4が skya、明度3～1が nag である。

様々な色相を通じ、明度8の色が modifier の位置に dkar を、明度3及び2のものが nag を、それぞれ持っていることは、Grumbacher chart によって判明しているが、Munsell 色票でどの位置にこれらの マーカー が出現するかを調べた結果が下記の表である。

色 相	飽和度	明 度							
		2	3	4	5	6	7	8	
5P	4	N	N					K	
5RP	4	N					K	K	
5R	10	N							
5YR									
5Y	6				N				
5GY	6/8							K	
5G	6	N	N	N				K	
5BG	4	N						K	
5B	4/6	N	N	N			K	K	
5PB	6	N						K	

(色相表示は Munsell による。K は dkar, N は nag の略記。)

色相によって、K と N の現れる位置が前節の記述と若干ずれているが、おおむね一致しており、これらの資料から、K (dkar) は高い明度、N (nag) は低い明度のマーカーであると結論して大過ないと考える。

3. 形 態 論 的 手 続

チベット語の色彩語彙は、単独で用いられるときは必ず二つか四つの morph から成る。

単一の形態がそれだけで色名を指す場合、-pa, -po, -gu, -kha, -mdog の何れか

が接尾されなければならない。この内、-pa, -po, -gu は小辞、-kha と -mdog は「色」を意味する名詞である。小辞の前には動詞 (-pa のみ)、形容詞、名詞が立ち得るが、-kha と -mdog の前には物質名であることが明瞭な名詞のみが立つ。このことは後章に論ずる通り、基礎色彩語彙を他から弁別する重要な基準になる。-bang が小辞か名詞かは未だ判らないが、形態的手順という観点からすると、-gu に酷似している。

小辞を伴う色名二つが複合語を構成するとき、小辞は省かれる。例：sngon po + dmar po → sngo dmar (cf. BV-6) (p. 414)。

小辞を伴う色名が、-kha 又は -mdog のつく色名を修飾する場合は、N-mdog A-po (N=名詞、A=形容詞) 又は N# A# (#=ゼロ) の何れの形をもとり得る。例：rdza-mdog ser-po 又は rdza ser (cf. O-3) (p. 416)。

修飾関係が二つ存在するときは、A# A# A#-po の形をとる (cf. YG-8) (p. 415)。

小辞 -po を伴う色名が同一の色名を修飾する場合の形は、A-po A-mdog である (cf. O-8) (p. 416)。

4. 統語論的手続

色名語彙内部に働く統語的手続として、まず、修飾部は被修飾部の後に立つ点を挙げておかなければならない。これはチベット語全体に亘って通用するルールである。NA の形をとる複合語にはこのルールがあてはまるが、N-kha/mdog 又は N-kha/mdog A-po では、N と kha/mdog との修飾関係は上述のものと逆になる。

II. チベット語色彩語彙体系の分析

前章に記述した色彩語彙を分析するにあたり、二つの異なったアプローチが可能である。一つは構造的分析であり、もう一つは発展段階的分析 (所謂, developmental analysis)³⁾ である。前者では、基礎色彩語彙 (=Basic Colour Terms: 以下 BCT) も複合・派生による語彙も同一レベルで扱われ、明度・飽和度 (純度)・色相のそれぞれの意味領域において各語彙がどのような機能を果たしているかという点に分析の重点が置かれる。これに対し、後者にあっては、先ず BCT の弁別に焦点が当てられ、foci・来源・複合・派生・形態論的特徴などに照らして、各語彙がどの程度基礎的であるかという順位づけを行い、それを通して当該言語における色彩語彙の展開の歴史

3) CONKLIN 1973 の用語規定に従う。

を窺おうとする。BCT 弁別の為の基準等については, pp. 423-4 及び p. 426 以下に詳述する。

1. 構造的分析

1) 明 度

p. 418 の記述から *dkar*, *skya*, *nag* が明度をマークすることが既に判明している。「青」を示す横列 (図1参照) が最も典型的にこのことを裏づけているが, *skya* はそれ程明瞭に出てこないし, 他の形態にとって替わられることがある (cf. G-8)。又, Munsell による調査では *skya* は出現しない。これらの事実から, 明度の指標となるものは *dkar* と *nag* のみであると考えたい。

上記の中立色の他に, Grumbacher による調査 (図1) では, 明度5の付近に *dmар* 「赤」が modifier の位置を占めているものがある (例: V-4/5/6, BV-6, YO-4/5, RO-5/6/7) が, これらは混合色の一方を指すか, 飽和度の指標になっているかの何れかであって, 明度とは関係がない。p. 411 に述べた通り, Grumbacher chart は, 各色相の明度4~5の部分のみが最高純度になっているので, *dmар* が出現するのである。飽和度については下の3) を参照されたい。

2) 色 相

色相は物質名によって表現されるが, *dmар*, *sngo*, *dkar* と *nag* はその来源をつきとめることができなかった。これらが本来色名なのか否かは, 現段階では分からない。各色相名称については前章を御覧頂きたい。

3) 飽和度 (純度)

上で触れたが, 高純度は *dmар* 「赤」によってマークされる。Munsell 色票は同一色相, 同一明度の色を更に純度によって区別しているので, Grumbacher から演繹される処が正しいか否かを, 之によって再点検することができる。次頁上にその結果を表示する。×印は *dmар* が modifier の位置に出現することを示す。表示係数は全て Munsell による。

これを見ると, 各色相の最高純度又はその次の純度の所に, *dmар* が現れていることが分かる (色相・明度によってその最高飽和度は異なっている。これに関する理論については, [MUNSELL 1975] を見られたい)。このことから, *dmар* は色相の「赤」を表わすとともに, 飽和度が高いことを示す指標として機能していると結論してよいと思う。

例えば, *ljang dmar* (緑・赤) は緑と赤の混合色を表示するのではなく, 「最も純

色相	明度	飽		和		度	
		2	4	6	8	10	12
5P	3/4				×	×	
5RP	4					×	
5R	4						×
5YR	6/7						×
5Y	8						×
5GY	7/8					×	
5G	6					×	
5BG	5/6				×		
5B	5				×		
5PB	4					×	

度の高い緑」「最も緑らしい緑」を意味する。

これに対し、低純度を表わすマーカーは存在しない。

上述の dmar は理論上、いかなる色相をも修飾し、高純度を示す筈であるが、上に掲げた表の様な実験的な場を除けば、實際上 foci となる色相を修飾する位置にか出現しない (foci については次頁及び図2を参照)。

4) まとめ

本節で論じたことをまとめると、次の様な表が帰納できる。

	高		低
明度	dkar	↔	nag
飽和度	dmar	↔	#
色相	物質名と gzings (動詞語幹), 及び sngo, dkar, nag, dmar (来源不分明)		

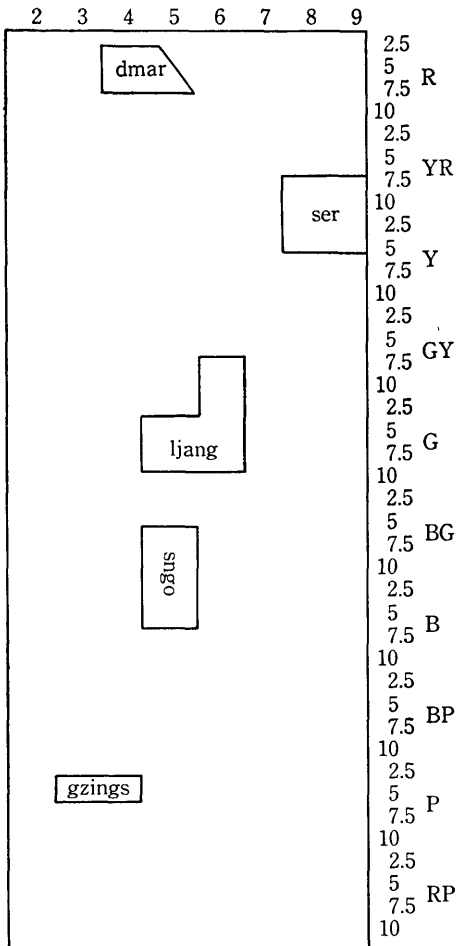
すなわち、構造と機能という観点からは、主として物質名から成る色相語彙に、明度と飽和度を示すマーカーがその modifier の位置に現れて、色を指定するという体系が観察される。

2. 発展段階的分析

1) BCT を他から弁別し、更にその中でどれがどの程度基礎的であるかという順位づけを行うには幾つかの基準の立て方があると思われる。文化人類学の方面では、パーリンとケイ (=Berlin & Kay: 以下 B & K) の基準が、多くの批判があるに

せよ、よく知られ、広く用いられているが、小論では之を全面的に受け入れることは避けたいと思う。何故ならば、B & K の基準はもともと、全ての言語を通じて存在する（と彼らが主張している）普遍的色彩範疇とその進化 (evolution) を求める為に立てられたものであり、「普遍的」なるものからして疑わしいが、仮にそれを認めるにしても、チベット語という個別言語における色彩語彙をその個別の変遷という脈絡で理解することを第一義的目的とする小論では、またそれとは別の基準の立て方が求められるであろうからである。

2) チベット語における foci は図2 に示す通りである。foci とは言うまでもなく、



focus「焦点」の複数形であって、この種のフィールドワークでインフォーマントに色票をみせ、どれが一番基本的な色か——どの色にインフォーマントの「焦点」があてられているか——を調べる方法とその結果の双方をいう。具体的には、一枚の板に色相と明度の異なる色票（純度はその最高飽和度のものになっている）を隙間なく貼りつけたもの（筆者の調査では色票320枚）をインフォーマントに示し、30秒以内に最も重要な色とその中でも典型的にその色と感ぜられるものを選ばせる。インフォーマントが二人以上いる場合は指定された色票を mapping して foci を定めるが、この調査では一人だけだったので、数回同じことを日をおいて繰り返し、そのずれを mapping してある。B & K はこの方法を BCT を決める際に最も重視するが、筆者はただ、BCT についての見当をつける補助手段として評価

図 2

するに留まる。しかし、今迄為されてきた色彩語彙についての調査では必ず foci の表が示されているので、それとの比較の便宜の為に調査結果を図示しておく。

3) このようにして大体の見通しのついた BCT は、チベット語の場合、如何なる基準を以て BCT と認定され得るであろうか。言語学的、特に形態論・語構成上の特徴と、語彙の来源・歴史という観点から、次の三基準を立て得ると考える。

- (1) その語彙は単一の語幹要素を持っているか、
- (2) その語彙は一つの語幹要素と一つの小辞から成っているか、
- (3) その語幹要素は何か他の物質を思わしめないか。

基準(1)は複合語を排除する為のもので、B & K の基準 a) に似ているが、B & K の用語“mono-lexemic”は誤解を生じ易い。“root-morphemic”とでも言い換えるべきであろう(B & K の基準については第三章1節を見られたい)。

基準(2)は語幹要素+小辞(-po, -pa, -gu)の構造をもつ語彙を、語幹要素+名詞(-mdog, -kha:「色」)の構造をもつそれから区別する。後者における語幹要素は文法範疇の上で必ず名詞であって、しかも、何らかの物質名であることが明瞭に分かるものであるから、前者における語幹要素に比べ、色彩語彙として基礎的である度合いが相対的に低いことになる。

又、前者の内では、-po が接尾するものを最も基本的と見做す。なぜならば、-pa は動詞の nominalizer であり、-gu は縮小小辞だからである。

基準(3)はその語彙が本来色名なのか、或いは他の物質名に由来するのか、を弁別

するものであり、インフォーマントが物質名を即答したか否かという心理的側面と、辞書や比較言語学的方法による語の歴史的側面を両方とも考慮に入れる。

第I章で得た資料に基準(1)を適用して、まず複合語を除き、残ったものは基準(2)と基準(3)の内、インフォーマントの心理的基準に照らしてみると、右の結果が得られる(0:基準を充たす, 1:基準に反する, 1/2:[基準(3)において]インフォーマント

色 相	基準 2	基準 3
gzings	0	1/2
sngo	0	1/2
ljang	0	1
gser	0	1
skyer	1	1
du	1	1
ser	0	1
dmar	0	0
mchin	1	1
li	1	1
kham bu	1	1
nag	0	0
skya	1	1
dkar	0	1/2

が1分以内に物質名又は関連する意味を言えなかったが、3分以内の辞典検索によって答えたもの)。

ここに得た数値をもとにグループ分けをすると次の様になる。

第1群	[0 0]	dmар, nag
第2群	[0 1/2]	sngo, dkar
第2群 a.	[0 1/2]	gzings
第3群	[0 1]	gser, ser
第3群 a.	[0 1]	ljang
第4群	[1 1]	skyer, du,mchin, li, skya, kham bu

第2・3群は -po が接尾するので、第2群 a・第3群 a よりも基礎的と考える。

以上がチベット人の意識に即した BCT の順位づけであり、第1～3群 a. の色相は、gser を除くと、foci 調査によるものと一致している。これらのことから、今、仮に基準 (2) に対して0の値を持つものをチベット語における BCT としておきたい。

さて、これら BCT を、チベット人の心理面とは関係なく、形態的特徴と語の歴史的側面に照らして考えた場合、どのようなグループ分けができるであろうか。基準 (2) (3) に下位基準を設けて再検討してみよう。

下位基準 (2') は、本来的な形容詞にのみ接尾する小辞 -po が付き得るか否かであり (接尾し得るものを0とする)、之を下位基準 (3') より優位に置く。下位基準 (3') は、来源を遡って明白にそれが知られるか否かであり、知られる場合の係数を1とし、全く不分明の場合を0とする。来源がよく分からないが、PTB の枠組みで考えた場合、それを推察できるものを 1/2 と定める。

これらの基準により、下表の結果が得られる。

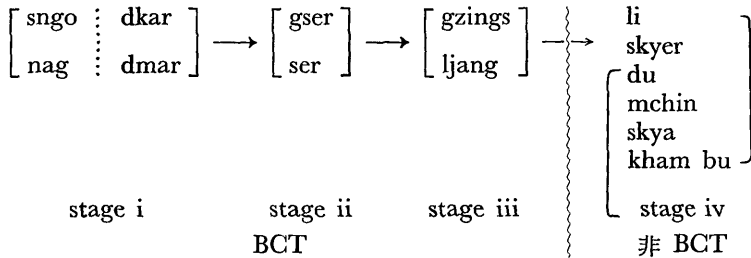
	基準 2'	基準 3'		
gzings	1	1	これをまとめると、次のグループ分けが可能である。	
sngo	0	0		a 群 [0 0] sngo, nag
ljang	1	1		b 群 [0 1/2] dkar, dmar
gser	0	1		c 群 [0 1] gser, ser
ser	0	1		
dmар	0	1/2		d 群 [1 1] gzings, ljang
nag	0	0		
dkar	0	1/2		

以上のことから、言語学的に見た場合の BCT 内部における基礎的である

ことの度合いと展開の順序・歴史を、a 群が最も基本的で古く、順に d 群に至るものと解釈する。d 群の後に e 群として非 BCT (前に掲げた第4群に属するもの) が続

くが、非 BCT の中での展開の順序については、適切な基準を立てることが難しく、小論での方法にはなじまないと思われるので、ここには論じない。又、a 群と b 群の間に截然たる一線を画することにも亦、若干の躊躇を感ずる⁴⁾。この段階では a と b を同レベルで扱う方が慎重な態度なのかもしれない。

本節に述べたことを図示するならば、チベット語色彩語彙の展開の段階は次の様である。



Ⅲ. 色彩語彙に関する一般理論——紹介と批判

色彩についての解釈やそれに付随する感情等に関する問題は、アリストテレス⁵⁾ 以来様々な角度から議論され、色の属性そのものについては、18世紀の物理学⁶⁾ によって解明の緒が与えられたが、語彙体系としての色彩用語の研究は今世紀に入ってから、特にアメリカの文化人類学者達によって推進されてきた。ターナー、コンクリン、バーリン、ケイ等の業績に見るべきものが多いが、中でもバーリンとケイの論文[B & K 1969] は色彩語易の意味論的研究を一步前進させたものとして評価されてよい。事実1970年代に為されたこの分野での研究は、賛否の如何を問わず、B & K 論文を出発点とするか、又は判断の目安としているものが多いので、本節では B & K の仮説を紹介・批判し、併せてチベット語等の事例に当って B & K 仮説の妥当性を検討したい。

1. バーリンとケイの仮説

B & K の根本的な考え方は、「言語が認識を規定する」というサピア・ウォーフの

4) dkar と dmar の d- が比較的新しい接頭辞であろうことは、ギャロン語やアオ語を参照することによって容易に推定できるが、語幹要素の意味指定は PTB/PLB の枠組でも必ずしも容易でないからである。

5) アリストテレスは我々が今問題としている BCT に対する具体的な基準を持っており、又、色相・純度・明度を既に概念的にはあるが区別していたようである。ΠΕΡΙ ΧΡΩΜΑΤΩΝ 792a 3-20 (邦訳では『アリストテレス全集』(岩波) 第10巻, pp. 5-6) を参照。

6) 代表的なものとして、I. NEWTON: *Optiks, or a treatise of the reflections, refractions, inflexions and colours of light*, London, 1704.

仮説に反対し、「認識が言語を規定する」ことを語彙意味論（語義論）を通して証明しようとするものであり、従って、意味の不連続性を否定し、代りに数学の fuzzy set theory 等を使って、意味の場の連続性と色彩範疇の普遍性を説こうというものである。

B & K は98言語における BCT を先ず調査しているが、そこに適用された BCT の基準は次の通りである。

- a) monolexemic であること → 複合語・派生語を排除する。例：英語 reddish-blue はこの基準に叶わない。
- b) mono-significant であること → 色名としての意味が他の語彙の意味に含まれないこと。色名が物質名から来源している場合、之を除く為の基準で、英語 crimson, vermillion 等は除かれる対象になる。
- c) その色名が特定のものにしか使われない場合、BCT から外す。例：英語 blond, roan 等は之に抵触する。
- d) 使用頻度が高く、使用法も一般的であることが、比較的明白に認められるものであること → 例：英語 puce (暗褐色), mauve (藤色) 等は除かれる [B & K 1969: 6]。

以上4項が主たる基準で、副次的基準として次の4項がある。e) 既に BCT として立てられたものと同じ意味領域を占めるものがあるとすれば、それは BCT かどうか疑わしい。f) 物質名がそのままでの表わす色をも意味するような語、例えば、英語 gold, silver, ash, は疑ってかかる必要がある。g) 最近の外国語からの借用は BCT でない。h) 上記の基準によってもその語彙の査定が困難な場合、形態論的複合（構造）が二次的に問題される [B & K 1969: 6]。

B & K は実地調査（20言語）と文献調査（78言語）にこの基準を適用して BCT を抽出し、実地調査には foci のチェックをも施した結果、「色名範疇は決して言語によって偶発的に決められているのではなく、BCT の foci は全ての言語において類似している」[B & K 1969: 10] とし、全ての言語における BCT の foci の数は2から11の間にあり、之を普遍的意味範疇のセットの主たる指標と解釈している。そして、98言語全てに妥当する BCT 数の差異を次の様に説明する。

- (1) 全ての言語は「白」と「黒」を持つ。(2) 三つの BCT があるとすれば、それは「白」「黒」「赤」である。(3) 四つの BCT があるなら、それは(2)の色と「緑」か「黄」の何れかである。(4) 五つの BCT があるとすれば、それは(2)の色と「緑」「黄」の双方である。(5) 六つの BCT があれば、それは(4)の色と「青」である。(6) 七つの BCT があるなら、それは(5)の色と「茶」である。(7) 八つ又はそれ以

type	Number of BCT	W	Bk	R	G	Y	Bl	Br	Pi	Pu	O	Gr
1	2	+	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-
2	3	+	+	+	-	-	-	-	-	-	-	-
3	4	+	+	+	+	-	-	-	-	-	-	-
4	4	+	+	+	-	+	-	-	-	-	-	-
5	5	+	+	+	+	+	-	-	-	-	-	-
6	6	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-	-
7	7	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-
8	8	+	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-
9	8	+	+	+	+	+	+	+	-	+	-	-
10	8	+	+	+	+	+	+	+	-	-	+	-
11	8	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-	+
12	9	+	+	+	+	+	+	+	+	+	-	-
13	9	+	+	+	+	+	+	+	+	+	-	+
14	9	+	+	+	+	+	+	+	+	+	-	+
15	9	+	+	+	+	+	+	+	-	+	+	-
16	9	+	+	+	+	+	+	+	-	+	-	+
17	9	+	+	+	+	+	+	+	-	-	+	+
18	10	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	-
19	10	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	-
20	10	+	+	+	+	+	+	+	+	+	-	+
21	10	+	+	+	+	+	+	+	+	-	+	+
22	11	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+

図 3

上の BCT があるとすれば、それは(6)の色と「紫」「桃色」「橙色」「灰色」又はこれらの組合せを必ず含んでいる [B & K 1969: 3-4]。

B & K はこれら BCT 数とその組合せの分布を図3の様を示している。

次に B & K はこの BCT 数の増大と各言語における BCT の展開の歴史は平行している——つまり、上記の(1)から(7)への BCT 数の変化とその過程は全ての言語にあてはまる、と主張し、それを次頁の様に図示する ([B & K 1969] の表は極めて単純だったが、何回かの改訂を経ているので、最近のものを示しておく)。

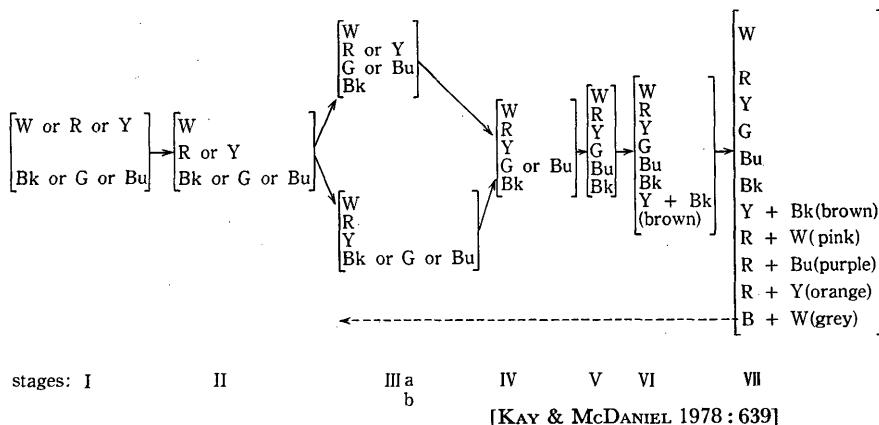


図 4

2. パーリンとケイの仮説の問題点

以上に概観してきた B & K の仮説はどの程度妥当性を持つものであるか。既に多くの書評もあるが、筆者なりの批判を試みたいと思う。

1) 先ず foci と BCT 基準についてであるが、この様な方法を具体的に、初めて提案したという点において、彼らは高く評価されるべきである。foci 調査が最高純度の色票によってのみ行われている点、基準 c) d) e) f) は互に重なり合い、redundant である点、基準 h) を実際に活用すべきである点、等々、問題はあが大筋において肯首し得ると思う。

2) しかし乍ら、B & K の実際の調査方法は相当杜撰であって、折角の方法論がその価値を失っていることが多い。材料についても同様のことが言える。B & K の居るパークレーから出版されている良いモノグラフを使わずに、前世紀の宣教師の記録を使ったり、学生のレポート（アジアの言語には之に依るものが多く、日本語も例外でない。而も同じ学生の書いた中国語の記述も B & K は用いている）に頼るものが多い⁷⁾。又、原資料は良くても、B & K の不注意から形態認定を誤り、原資料の価値を減じているものも相当ある（例：ネスパース語⁸⁾）。先ず彼らの使った材料には余り信を置けないか、又は B & K の操作が稚拙であると考えられる。

次に考慮に入れておくべきは bilingualism の問題である。B & K の被調査者は、幾つかの例外を除き、サンフランシスコ 近辺に住む英語との bilinguals である。

7) cf. [HICKERSON 1971: 263-4].

8) cf. [HICKERSON 1971: 266].

bilingualism の色彩語彙体系に及ぼす影響については既にアーウィン⁹⁾ (ERWIN: Semantic shift in bilingualism, *AJPs* 74, 233-41) の優れた研究があり, B & K はこういった biasing factor を考慮に入れておく方が安全であろう¹⁰⁾。そうでないと, その当該言語における体系と bilingual のもつ体系との差異すら提示できなくなってしまうからである。

サンプル抽出法についても問題がある。B & K の様な普遍性を探究する研究では, 類型の異なる言語をバランスをとって慎重に選び出す必要があると思われるが, 98言語の分布はかなり偏っている。チベット・ビルマ系 (T-B) 言語は一つもないし, アルタイ系は一言語のみ, 又, アウストロ・タイではタイ語だけしか扱われていない。之に対し, Congo-Kordofanian 系は23言語が含まれている [HICKERSON 1971: 264]。

3) 次に BCT 基準の適用法を検討してみよう。前にも述べた通り, BCT 基準そのものには概ね賛同し得るが, 実際には之を使っていないのではないかとさえ思われる。我々に身近な日本語・英語について見てゆきたい。

B & K によれば, 日本語は stage VII に属し, 11の BCT を持っている。しかし, 筆者の見解では, 日本語は stage IIIa に属し, BCT 数は4であって, 次に挙げる七つの語彙は BCT とは考えにくい。以下に理由を列挙しておく。ア)「緑」は普通「青」の意味領域に含まれるから, 基準 e) に触れる。又, この語源は不詳だが, 八重山方言で「芽」を指すことから, 之を元来の意味とする国文学者がおり¹¹⁾, この説が正しければ, 基準 b) にも抵触する。イ)「黄」は染料の名 [↔ 基準 b)]。ウ)「茶」は物質名で, かつ借用 [↔ 基準 b)]。エ)「桃色」は基準 b) に触れ, 「ピンク」は g) にあたる。オ)「紫」は染料, 又は染料をとる草 (*Lithospermum erythrorhizon*) の名 [↔ 基準 b)]。カ)「橙」は果実の名 [↔ 基準 b)], 「オレンジ」は借用 [↔ 基準 g)]。キ)「灰色」は基準 b) に抵触し, 「グレー」は借用語である。

英語も亦 stage VII に入っているが, 筆者によれば, stage VI と VII の中間に位置すべきである。何故ならば, orange は果実の名, pink は OED によれば花 (カーネーションの一種) の名であって, 共に基準 b) に触れるからである。

9) ERWIN の研究は, ナヴァホ・インディアンにおける色彩語彙が, ナヴァホ語のみを使う者と英語との bilingual との間でどのように違うかを分析したものである。

10) この調査のインフォーマント, 祖南洋氏もチベット語と日本語の bilingual であるが, この二言語は第一次的 BCT が共に K & M のいう Stage IIIa に属すことなど, 典型的に似ているためか, それ程の bias は認められない。

11) 例えば, 佐竹 1955: 6。小論では佐竹論文に触れなかったが, 之は万葉・記紀時代の文献を渉猟し, 佐竹氏なりの基準によって基礎色彩語彙体系を明らかにした労作である。

B & K の母国語たる英語にあっても彼ら自身の作った基準を厳密に適用していないことや、日本語の場合を考えると、基準の運用を怠り、foci のみによって BCT を決定しているのではないかと思われる。

4) B & K は BCT 範疇のタイプをその数によって分類したのみならず、その変化 (BCT 数の増加) がとりも直さず各言語に於ける BCT の通時的展開であって、その過程は全ての言語に共通するとも主張している。B & K の用語で evolution というのがこれであるが、果して B & K の言う進化は各言語の BCT の展開の歴史に通有するであろうか。

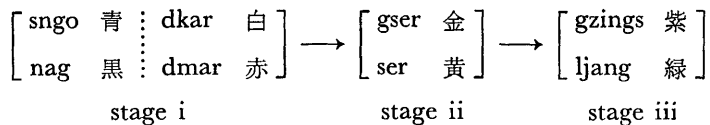
[HICKERSON 1971] や [CONKLIN 1973] には B & K の方法そのものに対する厳しい批判が読みとれ、「進化」についても、主としてアメリカ・インディアン語やアフリカ諸語における B & K 仮説への反証が示されている。又、[BRANSTETTER 1977] もポリネシア祖語の研究を絡め、言語学的方法によって得られた色彩語彙の変遷が B & K のモデルに合わないことを指摘している。チベット語にあっても同様であって、後節に述べる通り、極めて局所的にしか B & K 仮説はあてはまらない。

こういった言語事実についてだけでなく、モデルを作る際の発想そのものにも問題がある。例えば、B & K は BCT 数の増加を各言語におけるその通時的変化と直結させているが、論理的には逆の場合もある筈で、事実それに近い現象を Hickerson が指摘している。

5) 本節では、第 I・II 章に記述・分析したチベット語色彩語彙体系を、B & K 仮説に照らして検討しておきたい。

[B & K 1969] にはチベット語は扱われておらず、彼らの見解は不明である。

第 II 章 1 節に論じたチベット語色彩語彙構造は B & K の目指す方向とは相容れないので、pp. 423-5 に述べたチベット語 BCT とその変遷についてのみ、B & K のモデルと比較したいと思う。まず、その結論を再録するならば、チベット語の BCT とその歴史的展開は次の様に図示できる。



チベット語は、foci と語構成・形態的特徴によって抽出した八つの BCT を持っている訳であるが、之は図 4 (Kay & McDaniel ← B & K の改訂) ではどの段階にも巧く適合せず、B & K が判断すればおそらく stage VII の不完全な変種というこ

とになろう。又、図3でも何れのタイプにもあてはまらず、B & K のいう普遍性もチベット語には通用しないことが分かる。

ただ、上記の BCT は筆者自身の基準によるものであるから、之に B & K の基準を適用し、篩にかけた上で今一度 B & K のモデルに立ち返ることにしよう。B & K の基準 a) c) g) については、8 BCT は全て適格であるが、基準 b) e) f) を厳密に適用すると、stage i にある 4 BCT のみが適格となり、之は K & M の stage IIIa に当る。B & K の基準 b) e) f) の適用方法は相当緩かであって、それを基礎に図4ができていなのだから、どこ迄こういう比較が意味を持つか疑問だが、チベット語の最も基本的な BCT が stage IIIa の段階にあることだけは確かである。

次に通時的展開について考えてみる。まず p. 424 に掲げた a 群 → d 群への変化を K & M の図 4 (p. 428) に求めようとする、全て適合しない。a 群・b 群を合わせた stage i を問題とすれば、之は K & M の stage IIIa になり、stage i と ii を合わせた段階は stage IV に当たる。但し、この場合、gser と ser は同源語であり、ser が gser の意味領域を完全にカバーし得る、という前提の下に、gser を BCT から外さないと stage IV には入らない。stage i, ii, iii を合わせた最新の BCT 段階は K & M の図には適当な場が存在しない。

4. ま と め

以上概観してきた通り、B & K 及び K & M の仮説には言語事実にそぐわない点が多い。しかし、foci を決める方法や具体的な BCT 規定基準そのものは高く評価されてよく、その点では筆者の批判を含め、今迄為された多くの反証は、決して B & K モデルの価値を減ずるものではない。問題は如何に言語事実をおさえ、如何に基準を適用するかであり、それが厳密に行われたなら、より豊かな仮説が導き出されるであろう。

ただ、私が B & K の方法に根本的に不満なのは、個別言語における色彩語彙の構造を全く無視し、BCT 数と foci の認定にのみ意を注いでいる点である。勿論 B & K の方法の方がより早く BCT の普遍的モデルに到達できるし、B & K 流に言えば、構造を問題にすれば類型論に陥り易いかもしれない。しかし、各言語がそれに即した語彙体系を保っていることも亦事実であり、仮に類型論になったとしても、それなりの意味は充分あると思われる。実際、[B & K 1969] に対する書評の多くがそろって讃揚しているのは、皮肉にも B & K が批判して止まなかった類型論的分析——BCT 数と foci のあり方によって 98 言語を分類して解説を加えた部分——に対してであったのである。

Ⅳ. チベット・ビルマ共通祖語における

色彩語彙体系とその変遷

チベット語の BCT, 及び, 第Ⅱ章1節に論じた構造が, どのような体系から来源しているかを模索することは, 現在のチベット・ビルマ比較言語学の段階では極めて危険なことと言わなければならないが, 個々の形態とそれが織りなす体系についての手掛りが与えられている場合, 或る程度信憑性のある推測を働かすことは可能である。

特にチベット語の場合, 第Ⅱ章1節に述べたマーカの構造と機能が明瞭であり, 而も, それらのマーカが, 先に論じた通り, 最も基本的な BCT と認められることから, これらの語彙そのものと構造とを遡って, チベット祖語 (PT)¹²⁾ とチベット・ビルマ共通祖語 (PTB) の段階にあっても矛盾のないモデルの設定とそれに対する説明ができるならば, それを一仮説とすることは許されよう。

1. PT 及び PTB 段階での色彩語彙体系——推論

勿論, PT と PTB の話し手は存在せず, 従って, 飽和度・明度のマーカを p. 418 と p. 421 で行った実験によって確かめることは不可能である。そこで本節では, 第一次的 p. 421 が色相とともに, 何らかのマーカとしての機能を担っていたという前提の下に論を進めたい。

先ず PT の段階を検討してみよう。チベット語についての吟味から, 筆者は nag, sngo, dmar, dkar を第一次的 BCT とし, 之を色彩語彙発展段階の最も古い層と考えた。仮にこれらを PT の reflex であるとし, 上記の前提に照らすと, 上述の 4 BCT は色相であると同時に, 下記の機能を担っていたものと推察し得る。

	高		低
飽 和 度	*dkar	↔	*sngo
明 度	*dmar	↔	*nag

チベット語において, 低純度を表わすマーカは存在しないのに対し, PT ではそこが *sngo によって標示されていたことになる。

色相については, p. 425 に示した stage ii, stage iii, stage iv のどこ迄が存在した

12) ここにいうチベット祖語とは, WT 成立直前のチベット語を指し, その点で SPRIGG 等のいう proto-Tibetan とは異なる。正確には pre-WT とでも言うべきかもしれない。

かは分からない。

次に PTB 段階を考察してみよう。PTB 形式は概ね STC [BENEDICT 1972] に従うが、TSR [MATISOFF 1972], VSTB [MATISOFF 1978] をも参照した。

STC 及び TSR に再構されている PTB 形式で色名と色に関連のあるものに、筆者の基準 1) 2) 3) 2') 3') と B & K の基準 b) を適用すると、次の四形式が第一次的 BCT として残る¹³⁾。

*sɲow *white* (STC # 296; VSTB 293); *yellow* (STC # 296)

*syim *blue/green/black/dark* (STC # 380)

*(r-)ni *red* (STC p. 46, p. 91)

*(s-)nak *black* (STC p. 88, p. 102, p. 155; TSR 142; VSTB 293)

これらの内、*sɲow は「白」として再構成されているが、T-B 諸言語の幾つかの方言では「黄」を表わすので、おそらく *sɲow は Witkowski の言う MACRO-white¹⁴⁾ にあたり、之に対立するのが *syim であろうと思われる。従って、PTB におけるマーカ―は次の様に想定され得る。

	高		低
飽 和 度	*sɲow	↔	*syim
明 度	*(r-)ni	↔	*(s-)nak

2. PTB 段階からの色彩語彙の変遷——仮説

以上の推論をもとに、これらマーカ―の変遷を次の様に説明したい(次頁図 5 参照)。

(1) 飽和度マーカ―の体系は PT でも PTB と同様に保たれたが、マーカ―の語彙は二つとも異なる。おそらく、*syim が先ず色相名へ転化して¹⁵⁾ 機能を失い、高純度の指標だった PTB *sɲow (色相では「白」) が PT では低純度指標として *sngo (色相では「青」) の形で現れ、何らかの金属名らしい *dkar が PT における高純度

13) この他、色に関するものとして次のものがあるが、何れも何らかの物質と同源関係がある。
WHITE *bok (STC p. 181), *plu (pp. 41, 46, 89): BLACK *tyaŋ (#225, pp. 52, 70), *syim (#380): DARK *mu-ŋ (#362), *ŋruw (#156), *r-mu-k (#357), *rum (#401), *syim (#380), tyāŋ (#225, pp. 52, 70): LIGHT *hwa-t (#221): BRONZE *kar (p. 15): SUN *nam (p. 148), *niy (#81), *tsyar (#187): NIGHT *ya (#417): GREEN *dzim (p. 81), *kruŋ (#383), *s-ŋow (#296), *s-riŋ (#404): GOLD *tsyak (#184): SILVER *ŋul (pp. 15, 173)

14) [WITKOWSKI & BROWN 1978: 439].

15) 正確に言えば、*syim が色相名に転化したのか、全く異質の意味領域へ移ったのか明らかでない。当初 WT gzings と同源と推定したが、末子音の対立を考えると之は無理で、今は WT gzim 又は sim をこの reflex ではないかと考えているが、之にも確証はない。

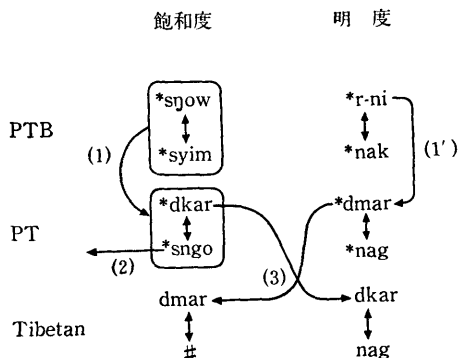


図 5

マーカーとして入った、と思われる。

(1') 高明度指標は PTB *r-ni から PT *dmar になったが、この間の説明は巧くつかない。しかし、ギャロン祖語 *rni¹⁶⁾ もタマン祖語 *mar¹⁷⁾ も共に gold を意味する点は注目してよい。仮にこれら下位祖語の設定によって上記の PTB/PT 形式が gold の意を持っていたことが証明できるとすれば、互に同源ではないが、意味の場を共有する語彙が、共に高明度指標だったことになる。

(2) PT *sngo は専ら色相を示すものに転化して、マーカーとしての機能を失った。

(3) その結果、純度指標は PT *dkar ↔ # となったが、*dkar にはこの無標の意味の場を支える力がなく、dmar が之に代り、PT *dkar はチベット語では高明度指標に転化した。「赤」は一般に最も「強い」色と言われ、明度・飽和度を一定にした種々の色相票を比較すると、「赤」が最も高い飽和度を持っているように見える¹⁸⁾ ことから、dmar が低純度指標ゼロに対立する位置へ入るのは自然であると考えられる。

以上が現段階で最も蓋然性の高い説明であろうと思われるが、*a posteriori* な解釈であることに変わりはなく、より積極的な証左を求めた上で将来修正を施すべきものである。

む す び

以上の記述と解釈とによって、チベット語色彩語彙体系とその歴史的来源に関する

16) cf. [NAGANO 1979c].

17) cf. [西 1977].

18) [SAHLINS 1976: 4] に詳しい実験の結果が出ている。

概要を示し得たと思う。色彩語についての一般理論も、この種の個別言語に分析の焦点をあてた研究に立脚して再検討される時期に到っていると思われる。

又、チベット・ビルマ比較言語学の立場からも、数多くのこのようなモノグラフが現れることが望まれる。T-B 諸言語の比較は、現段階では、その音韻対応通則の精密化に研究の主力が注がれるべきことは言うまでもないが、その一方で、語彙の占める意味の領域を明確にし、更にその通時的変化を跡づけることは、比較そのものに新しい視野を提供し得ると思われるからである。小論はそのケーススタディーであるとお考え頂きたい。

注

小論は、カリフォルニア大学(パークレー)言語学部に Ph. D. 資格審査第二論文として提出した *An Analysis of Tibetan Colour Terminology* に相当の改訂を施したものである。指導教官として有益な助言を惜しまれなかった W. L. チェイフ教授、J. A. マティソフ教授、張珉教授に対し、深甚の謝意を表したい。

原英文は *Tibeto-Burman Studies* No. 1 (*Monumenta Serindica* vol. 6, 東京外国語大学 A. A. 研)の一部に採用して頂き、それを機に多くの批判を仰ぐことができた。小稿に修正を盛り込むことができたのは、ひとえに同シリーズの編者、北村甫教授(A. A. 研)、西田龍雄教授(京都大学)、西義郎教授(鹿児島大学)のお蔭である。又、B & K 論文に対する書評等については、カリフォルニア大学東洋語学部の青木晴夫教授から教えて頂いた点が多い。厚く御礼申し上げる次第である。

参 考 文 献

- BENEDICT, P. K.
1972 *Sino-Tibetan; a conspectus*. Cambridge.
- BERLIN, B. & E. A. BERLIN
1967 Aguaruna Color Categories. *American Ethnologist* 2: 61-87.
- BERLIN, B. & P. KAY
1967 Universality and Evolution of Basic Color Terms. *Working Paper* 1. Berkeley: Language Behavior Research Laboratory.
- BERLIN, B. & P. KAY
1969 *Basic Color Terms*. Berkeley & Los Angeles: University of California Press.
- BORNSTEIN, M. H.
1973 Color Vision and Color Naming. *Psychological Bulletin* 80: 257-285.
1973 The Psychological Component of Cultural Difference in Color Naming Illusion Susceptibility. *Behavior Science Notes* 8: 41-101.
- BRANSTETTER, K. B.
1977 A Reconstruction of Proto-Polynesian Color Terminology. *Anthropological Linguistics* 19(1): 1-25.
- BROOCH, H. B.
1974 A Note on the Hare Indian Color Terms. *Anthropological Linguistics* 16(5): 192-196.

- BUCK, C. D.
 1949 *Dictionary of Selected Synonyms in the Principal Indo-European Languages*. Chicago
- CASKEY-SIRMONS, L. A.
 1977 Semantic Shift and Bilingualism. *Anthropological Linguistics* 19: 358-367.
- COLLIER, G. A.
 1973 Review of Berlin & Kay 1969. *Language* 49: 245-248.
- COLLIER, G.A. *et al.*
 1976 Further Evidence for Universal Color Categories. *Language* 52: 884-890.
- CONKLIN, H. C.
 1955 Hanunoo Color Categories. *South-West Journal of Anthropology* 11: 339-344.
 1972 Color. In *Folk Classification*. Yale University Press.
 1973 Review of Berlin & Kay 1969. *American Anthropologist* 75: 931-942.
- D'ANDRAE, R. G.
 1974 The Colors of Emotion. *American Ethnologist* 1: 49-63.
- DE VALOIS, R. L. & G. H. JACOBS
 1968 Primate Color Vision. *Science* 162: 533-540.
- DIMMICK, F. L. & M. R. HUBBARD
 1939 The Spectral Location of Psychologically Unique Yellow, Green and Blue. *American Journal of Psychology* 52: 242-254.
- DURBAN, M.
 1972 Basic Colors. *Semiotics* 6: 257-277.
- EMBER, M.
 1978 Size of Color Lexicon. *American Anthropologist* 80
- FILLMORE, C. J.
 1975 An Alternative to Checklist Theories of Meaning. *Proceedings of Berkeley Linguistics Society* 1: 123-131.
- FISHMAN, J. A.
 1960 A Systematization of the Whorfian Hypothesis. *Behavior Science* 5: 323-339.
- GLADSTONE, W. E.
 1858 Homer's Perceptions and Use of Colour. In *Studies on Homer and the Homeric Age* 3: 458-499, Oxford.
- HARKNESS, S.
 1973 Universal Aspects of Learning Color Codes. *Ethos* 1: 175-200.
- HAYS, D. G. *et al.*
 1972 Color Term Salience. *American Anthropologist* 74: 1107-1121.
- HEIDER, E. R.
 1971 "Focal" Color Areas and the Development of Color Terms. *Developmental Psychology* 4: 447-455.
 1972 Probabilities, Sampling and Ethnographic Method. *Man* 7: 448-466.
 1972 Universals in Color Naming and Memory. *Journal of Experimental Psychology* 93: 10-20.
- HEIDER, E. R. & D. C. OLIVIER
 1972 The Structure of the Color Space in Naming and Memory for Two Languages. *Cognitive Psychology* 3: 337-354.
- HEINRICH, A. C.
 1972 A Non-European System of Color Classification. *Anthropological Linguistics* 14: 220-227.
 1974 Color Classification of Some Central Canadian Eskimos. *Arctic Anthropology* 11: 68-72.
- HICKERSON, N. P.
 1971 Review of Berlin & Kay 1969. *International Journal of American Linguistics* 37(4): 257-270.

長野 チベット語の色彩語彙

JAMESON, D. & L. M. HURVICH

1968 Opponent-response Functions Related to Measured Cone Photo-Pigments. *Journal of Optical Society of America* 58: 429-430.

KATZ, J. J.

1964 Analyticity and Contradiction in Natural Languages. In FODOR & KATZ (ed.) *The Structure of Language*, Prentice-Hall, N.Y.: 519-543.

1966 *The Philosophy of Language*. New York.

KAY, P.

1970 Theoretical Implications of Ethnographic Semantics. In *Current Directions in Anthropology*, Washington.

1975 Synchronic Variability and Diachronic Change in Basic Color Terms. *Language and Society* 4: 257-270.

1975 Tahitian Words for Race and Class. *Working Paper* no. 40. Berkeley: Language Behavior Research Laboratory.

KAY, P. & C. K. MCDANIEL

1978 The Linguistic Significance of the Meaning of Basic Color Terms. *Language* 54: 610-646.

KEMPTON, W.

1978 Category Grading and Non-Taxonomic Relations. *American Ethnologist* 5: 44-65.

北村 甫

1974a 『現代チベット語の発音』東京外大 A. A. 研。

1974b 『チベット文字入門』東京外大 A. A. 研。

KUSCHEL, R. & T. MONBERG

1972 We Don't Talk Much About Colour Here. *Man* 9: 213-242.

LAKOFF, G.

1972 Hedges. *Papers from the 8th Regional Meeting*. Chicago Linguistics Society.

MATISOFF, J. A.

1972 *The Loloish Tonal Split Revisited*. Berkeley: Center for South & Southeast Asia Studies, University of California.

1973 *Lahu Grammar*. Berkeley & Los Angeles: University of California Press.

1978 *Variational Semantics of Tibeto-Burman*. Philadelphia: Wolfenden Society.

McNEIL, N. B.

1972 Colour and Colour Terminology. *Journal of Linguistics* 8: 21-33.

MERRIFELD, W. R.

1971 Review of Berlin & Kay 1969. *Journal of Linguistics* 7: 259-268.

MUNSELL, A. H.

1975 *A Color Notation* (12th ed.). Baltimore.

NAGANO, Y.

1979a An Analysis of Tibetan Colour Terminology. *Monumenta Serindica* no. 6.

1979b A Historical Study of rGyarong Prefixes and Initials. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 4(2): 44-68.

1979c A Historical Study of rGyarong Rhymes. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 5(1): 37-48.

西 義郎

1977 「Tamang 祖語の再構をめぐるいくつかの問題について」『鹿児島大学教養部 史学科報告』26: 53-68。

西田龍雄

1968a 「リス語比較研究 (I)」『東南アジア研究』6(1): 2-35。

1968b 「リス語比較研究 (II)」『東南アジア研究』6(2): 19-47。

1970 『西番館譯語の研究』松香堂, 京都。

1973 『多續譯語の研究』松香堂, 京都。

- POLLNAC, R. B.
 1975 Intra-Cultural Variability in the Structure of the Subjective Color Lexicon in Buganda. *American Ethnologist* 2: 89-109.
- PANOFF-ELIET, F.
 1971 Review of Berlin & Kay 1969. *L'Homme* 11: 100-103.
- RATLIFF, F.
 1976 On the Psychophysiological Bases of Universal Color Terms. *Proceedings of the American Philosophical Society* 120: 311-330.
- ROSCH, E.
 1975 Cognitive Representations of Semantic Categories. *Journal of Experimental Psychology* 104: 192-233.
 1977 Human Categorization. In *Advances in Cross-Cultural Psychology* 1-49, London.
- SAHLINS, M.
 1976 Colors and Culture. *Semiotica* 16: 1-22.
- 佐竹昭廣
 1955 「古代日本語に於ける色名の性格」『國語國文』24: 1-16.
- SNOW, D. L.
 1971 Samoan Color Terminology. *Anthropological Linguistics* 13: 385-390.
- STEPHENSON, P. H.
 1973 The Evolution of Color Vision in the Primates. *Journal of Human Evolution* 3: 379-386.
- TURNER, N. J.
 1974 Plant Taxonomic Systems and Ethnobotany of Three Contemporary Indian Groups of the Pacific Northwest. *Syesis* 7, suppl. 1.
- WATERNWYL, A. & H. ZOLLINGER
 1978 Color Term Salience and Neurophysiology. *American Anthropologist* 81(2): 279-288.
- WITKOWSKI, S. R. & C. H. BROWN
 1977 An Explanation of Color Nomenclature Universals. *American Anthropologist* 79: 50-57.
 1978 Lexical Universals. *Annual Review of Anthropology* 7: 427-451.
- WOOTEN, B. R.
 1970 *The Effects of Simultaneous and Successive Chromatic Constraint on Spectral Hue*. Ph.D. Dissertation. Brown University.
- ZADEH, L. A.
 1965 Fuzzy Sets. *Information and Control* 8: 338-353.
 1971 Quantative Fuzzy Semantics. *Information Science* 3: 159-176.
- ZOLLINGER, H.
 1973 Zusammenhänge zwischen Farbenennung und Biologie des Farbensehens beim Menschen. *Beierteljahrsschrift der Naturforschenden Gesellschaft* 118: 227-255.
 1976 A Linguistic Approach to the Cognition of Color Vision in Man. *Folia Linguistica* 9: 265-293.